

## 『千曲寮閉寮記念誌』発刊について

丸山 隆平（9組）

大学4年間（昭和43～47年）に居住した千曲寮が今年3月末で107年間の歴史を閉じた。私も寄稿し、このほど完成した『千曲寮閉寮記念誌』には昭和38（1963）年から平成28（2014）年までの在寮生50人ほどの、それぞれの思い出が深く刻まれたエッセイが踊っている。

長野県人寮であった千曲寮は、東急グループの礎を築いた五島慶太（1882-1959）などが中心的発起人になり、上田藩主の末裔である松平家の協力を得て、大正7（1918）年に千代田区三番町に創立された。

記念誌にまとめられている歴史によると、千曲寮設立の発議は大正6年1月に開かれた上田郷友会例会の席上であったという。上田郷友会は明治18年に上田地域出身の上京学生の連絡網、情報交換、研鑽の目的で創設され、山極勝三郎博士（1863-1930）が生みの親だったとのこと。関東大震災後の復興には、上田出身で民生委員制度の基礎を築いた法学者の小河滋次郎（1864-1925）、佐久出身の銀行家であった瀬下清（1874-1938）が再建趣意書を起草している。

昭和3年には「千曲寮寮友会会報」が創刊され、寮出身者の人的ネットワークを維持するベースとなったが、創刊号には多くの有力な卒寮生が寄稿している。

巻頭を飾ったのが小諸町出身で当時、時事新報社社長の小山完吾（1875-1955）。

当時の信州を代表する名士で、衆議院議員、貴族院議員を務め、福澤諭吉との縁が深かった。

千曲寮は軍国主義の時代を経て、昭和20年5月の東京大空襲で焼け、昭和28年には当時の衆議院議員で千曲寮専務理事を務めた勝俣稔（1891-1969）らが復興にあたった。

さて、私は千曲寮107年の歴史の前半の三番町時代最後の新寮生で、大学1年当時、寮を出て、都電で靖国通り「一口坂」から「九段下」まで、そこから地下鉄東西線で通学していた。新寮は三鷹市下連雀に建てられたが、完成までの間、建設にあたった戸田建設の南柏寮で過ごしたことを覚えている。

千曲寮の存在が、大学で社会学を学び、工業新聞記者から産業社会化の一面を描いてきた私のこれまでに大きく影響していることを、多くの先人に感謝をもって伝えたい。

次頁に写真2葉



千曲寮閉寮記念誌の表紙



早稲田大学1年の春、六大学野球優勝で千曲寮の先輩と、右から2番目が筆者

(2025年9月8日記)

以上